

---

# クズの素敵な一日

ポンポン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

クズの素敵な一日

### 【NZコード】

N0829R

### 【作者名】

ポンポン

### 【あらすじ】

社会的に負け犬でも今を頑張ってる人の話

(前書き)

この話はファンションです。

またこの時間に目が覚めてしまった。  
きっと昨夜なにも食べずに寝たからだな・・・。  
辺りを見るわけでもなく見渡す。  
ベッドから見える様子はいつもと変わりなし。  
ほど近くに置かれたテーブル。その上にはノートパソコン、他にタバコ、灰皿やらテレビのリモコンなどが乱雑に置かれている。  
散らかった洋服、溢れ返ったゴミ箱、宅配ピザの箱など。  
時計がないのでいつも通り起動したままのノートパソコンを見る。  
時刻は朝の4時20分。

今日も一日が始まってしまう。

手帳の代わりにしている携帯電話を確認する。  
12月10日・・・いつも通り予定はなし。  
予定は未定。まったくもって素敵な言葉だ。  
人生も同じだろ？先のことなんてわかりっこないし大切なのは今を満足させること。

とりあえず今の俺に必要なのは食事。腹が減つては戦はできぬって言う格言？もあるしね。

まずは飯でも食つて、それから今日を始めよ。俺の12月10日は食事から始まるんだ。

ボーッとした頭を目覚めさせるように起きながら起き上がる。

目覚めの一服。至福の時間である。

おはよう俺の脳味噌。

おはよう俺。

おはようすべてのクズ野郎。

恒例の儀式を終え、今日を始めるための準備でも始めようか。

と、そこで飯がなにもないことに気づいた。

しまった。昨日のうちににか買つておくべきだった……。

昨日の俺のバカ！

なにをしていたんだ昨日の俺は……。

昨日は・・・ダメだ。思い出せない。

でも、重要なのは昨日なにをしていたかといつことではなく、今飢えに飢えている俺の腹を満たすことだ。

コンビニ・・・は往復40分かかるし却下。

出前・・・もダメだな。こんな時間にやつてるわけもないし。あー、すごいうどんが食べたい。

そばじやダメだ。ラーメンでもダメだ。ものすごいうどんが食べたい。

うどんが食べたい、うどんが食べたい、うどんが食べたい、うどんが食べたい、うどんが食べたい。

というわけでうどん屋が開くまで朝飯は待つことじつよ。

なんだ、もう5時30分か。

とりあえずシャワーでも入るか……。

じつして今日も一日が始まってしまった。

わつぱりした頭と体を拭きながらカーテンを開ける。

空は雲ひとつない真っ青な快晴だ。

寝巻きから着替え、気分も一新してまた一服つける。

わつぱりこの時間が気持ちいい。

空が青いと心も自然と晴れ上がっていく気がするのはみんな同じだろ？

そこに自分の好きななかをプラスした時これが最高の時だと思い。

今日はいいことがありそうな気がする。

こんな気分を表わすには・・・音楽だ！

選んだ曲はBob MarleyのThree Little Birds。

・・・やっぱ音楽は最高だ。

人類最大の発明である言葉。言葉を最大限活用した最先端の技術でこの先も変わらないモノ。

やはり音楽は最高だ。

ジャンルはいろいろあるけど自分に合つものをチョイスするといい。音楽である以上それは変わらないんだからさ。ロックにポップス、ヒップホップにテクノ、スカにジャズにソウルに・・・。

あげればキリがないけどみんな愛について歌ってるだらう？

ミコージシャンも会社員も総理大臣もどつかのお偉いさんも、最近では小学生も赤ちゃんも知っているけど俺たちは愛がないとダメなんだよね。

だから俺は恋人に友人に家族に、これを見てくれている人にも愛を届けなきやつて毎日思うわけだ！

かれこれ恋人どころか気になる女性も6年程いないんだけどね。

・・・少し話が反れたけど音楽はその歌詞に、メロディーに共感できればそれはもう最高だ！

理屈じゃないにかがそこにはあるんだよ。

楽しみ方はそれだし決まった形もないけど、そこに気づいたとき君の中にはもう音楽が入ってきてるんだぜ。

中には商業目的の内容のない音楽もあるけど、そこは君の耳と心で判断してくれ。

音楽とはそりやつて聞くものなんだ！

「」で音楽に馴染みのない君にオススメしたいのはレゲエっていうジャンルの音楽。

これだけ言っておいて申し訳ないけど、正直俺も音楽の詳しいことはわからないんだ。

ただ、このレゲエはジャマイカっていう俺が生きている日本よりも貧乏な国で生まれた音楽で、過酷な環境だからこそ生まれるメッシュが詰まってる音楽なんだ！それだけは間違いなく言えること。気になつた人はジャマイカについて調べてみると。

どんなことを歌っているのか気になつてきた人もいるかい？

そんな君にはBob Marleyをオススメしておくから興味があるなら聞いてみると。

好きなことに没頭していると時間の感覚はなくなつて、漠然と充実したという結果だけが残るもので時刻は8時少し前。ようやく遅い朝食にありつける時間だ！

いい加減にしろと腹の悲鳴が聞こえてきたところでお皿洗いのうぶん屋に向かうとしよう。

朝からご機嫌な今日の俺にはすべてが新鮮に見えるんだ。いつも歩く駅までの道のりでも田舎らせば違った景色になる。雲がないせいでこまでも遠くまで見えるし、行きかう人の顔から何を考えているかなんてこともわかつてくる。  
意識つてするもんじゃなくてしてるものなんだなと思わせられる。まったくこの世はハッピーだ。

あと数分もすれば俺の胃袋ちゃんも陽気になるだろ？し、今日はいいことづくしなりそうな予感がブンブンするぜ。  
そう俺は今この瞬間生きているんだ！

「こりつしゃい！」

陽気な声に迎えられ店内へと入る。

店員は2人。いつも見るおつかやんとおばつかやん。

どうやら一番乗りのようである。まあ混んでるとこなんかみたことないんだけどね。

しかして昭和！といった内装は当時を知らない俺でもどこか懐かしさを覚えるような雰囲気でたまらない。

俺が注文するのは大体肉うどん。

ダシは～で自慢のうどんは・・・なんてことを気にするのはやめてくれ。俺には纖細な味の違いなんかわからないし、グルメになろうなんて思ったこともないんでね。

評価の仕方は簡単、うまいかまずいか。

命あるものをいただいているんだしそんなもんでいいだろ？  
では、いただきます。

馴染みのうどん屋を後にして帰路につく。

当然この先も予定は未定。

とりあえずロバーロでも借りようかと思つてブラリ駅前へ向かうとしたよ。

自販機でコーヒーを買いタバコに火をつける。

まったく、愛煙家の俺としては昨今の禁煙ブームはいい迷惑だよ。  
値上がりはするし、少ない喫煙スペースで吸つているだけなのに嫌な顔をされる。

人から嫌われたりなんてのはどうでもいいんだけど、自分のルールを大衆というある種武器じみたものを盾に俺に押し付けるのだけはやめてくれ。

俺は静かに生活がしたいんだ。

と、考えている間にもまた嫌な顔で見られる。まったく民主主義の中で少数派はいつだって悪だ。

Dear 世界中の愛煙家たちへ。

なにが正義で悪なのかを見極められる手を入れよう！  
少数派が悪いんじゃない。あいつらは理解しようと努力をしていいんだ。

わかるやつにだけわかれぱいいつていう時代でもないから俺たちは火をつける。

もちろん俺たちが頭ごなしにあいつらを批判してるわけじゃないってのはわかるよね？

平和と愛、そして互いの手をとりあつこと。それだけで世界は変わらはずや。

Can we change?  
Yes, we can.

なんてことを考えている間に煙は空へ消え、残ったのはけだるさとコーヒーの空き缶。

そしてクライアントからの着信通知。

さて今日も働くか。

めんどくせ。

「もしもし？あ、お疲れ様です！」

用件は知ってる。だがここでの対応は基本どおり。

「今大丈夫ですか？タカ君今日なにします？」

予定は未定。まあ予定が合つたとしても自分の都合のいいように動かないヤツなのは知ってる。

「マジっすか？だったら今日昼過ぎにそっち行つてもいいですか？」  
ここで商談成立。軽いもんだ。

「了解です！また連絡します！失礼しまーすー」  
や、アジトへ向かおう。

アジトへ到着。

待ち合わせの時間まで時間があるし借りてきたDVDでも見るとどうか。

どうせヤツは時間通り来ないし問題はない。

ここは通称アジト。いわゆる俺の別宅でせまいがテレビ、冷蔵庫、風呂もあるし普通に生活だってできる。

だが、いかんせん仕事のためにある場所なのでそれ以外のモノは特  
にない。長居はされたくないのだ。

今日の客は28才の会社員で横浜で一人暮らし中。俺より4つ年上  
だがなぜか俺のことを君づけで呼ぶ。年上だと思っているのかもし  
れない。

めったに連絡はこないが、たまの連絡が来ると大きい買い物をして  
いくいわゆる太客だ。

それ以外の情報は聞いたのかも知れないが覚えてはいないし、もち  
ろんヤツも知らない。

知らない方がいいこともある。暗黙の了解つてやつだよ。

ヤツにとつての俺は、ヤツが求めるものを提供するティーラーのタ  
カでヤツはそれ以外の俺を知らない。

ん？着信だ。

さあ、仕事の時間だ。

「お疲れ様です！今近くなんすけど・・・」

「はい！今行きます！」

呼び鈴が鳴り確認する。

間違いないヤツだ。

「お疲れ様です！いやータカ君久しぶりですね。」

『だな。最近元気してた?』

「まあほちほちすね。でもこないだ仕事でちょっとミスつちやつて……」

先月もそんなこと言つてたのは覚えてる。もしかすると先々月も言つてたな。

『なに? また例の上司になんか言われたの?』

「ううんすよー。なんかもう前回の件で完全に嫌われちゃつたみたいで……。もう仕事やめようかつて思つてるんです。」

『そうなんだ。やつてらんねーな。』

「ホントですよー本当にちよつとしたミスなのに……」

さんざん弱音を吐き散らかし、俺は悪くないと遠まわしに説明する。それを俺に言つようじやまだまだつてことだよ。

世の中甘いことばかりではない。一度のミスが命取りになることだつてあるのだ。

だけど俺は知つてる。

人は一人では生きていけない弱い生き物だ。

そんなヤツに手を差し伸べてやるのも優しさつてもんだろ。

『大変だね。まあとりあえず一服つけようか?』

「いいんですか? ありがとうございます!」

用意しといた物を見せると目の色が変わる。

そう俺たちの関係は友達じゃない、密接ディーラー。

一服つけてからが商談の開始だ。

「今回のもヤバいつすね。」

『ありがと。まあ俺が持つてゐるのに変なのは一切ないよ。混ぜ物も一切なし。』

「ヤバいつすね!」

『当然だよークスリなんか死んでもやらない。いくら金詰まれてもムリ。』

「クスリはダメっすよね。」

『 そうだよ。手出したら最後。人生終わるよ? 人が作り出したものだもん。ヒコじやねーよな。』

俺はそれでダメになつたやつをたくさん知つてゐる。

さらに言つなら俺はそれを経験もしてゐる。

だから俺には自分の客にそれを伝える反面教師としての使命もあるのだ。

「間違いないっす。あ、タカ君それどうしたんすか?」

DVDを指差す。

こいつ話聞いてるのか?

『 ああ、さつき借りてきた。』

『 うわーこれ見たかつたんすよね! どうだつたつすか?』

『 なんかいまいち。オススメはできないな。』

『 マジっすか? つてか映画とかよく見ます? 俺めっちゃ映画好きなんですよ!』

相手の話も聞かなくてはならない。

相手を理解していないとトラブルの元になるからな。

商談は大変だ。

しかしあめんどくさい。

『 へー、そなんだ。』

『 こないだアレ見てきたつすね。あの今やつてゐやつ。えーっと・・・  
・あの3Dのアレっす。』

『 あーアレか。俺普段あまり映画見ないからな。』

『 マジっすか? いやでもアレはよかつたすよ! なんていつたつけな

「・・・思い出せそうにないつすわー。」

『ははは。』

そろそろいい時間だな。

おもむろに商品を手に取る。

ヤツも様子を察知したのか軽く身構える。

日本人の美德だね。

「にしてもこれいいつすねー！やつぱタカ君のヤバいつすよ。」

『今日何個かもつてくれ？』

『いいっすか？』

『全然問題ないよ。最近大変そつだし息抜きも必要じやん？』

『間違いないっすわー！ホント・・・』

急にうつむき静かになる。

考え込む時間じゃないぜ？

『おいおい、そんなネガティブになんなつてーせつかくいい気分なんだからさ。お前がやることやってたら、ムカつく上司もなんも言えないんだから。わからないやつにはわからしてやんだけよ。』

商談も大詰めか。

「でも、あの人は・・・」

『でも・・・とかじやなくてさ、やることやればいつか認められるつて。それでわからないヤツがいたらそいつがよっぽどのバカってことだよ。俺たちには可能性がある。』

俺がなにかを伝えるときそこには嘘はないんだ。

人と人をつなぐのは言葉で、言葉には心がある。

心で話してわかるヤツに嘘はいらないし嘘はバレるからな。  
心が伝わったときつて言葉はなくなるもんだよ。

「・・・・・。」

『こいつもそうだよ。わからないやつが世界の大半じゃん?でも知つてるやつは知つてる。昔の人も知つてた。今世界の大半の人間も知つてんだよ!・・・まあそういうことだよな。』

うつむいた顔を上げ言つ。

「確かに・・・。そうかもしれないですね!」

『用は気の持ち方だよ。元氣出しな。』

「いやー、タカ君まじで尊敬します!」

『ありがと。それじゃあどうじょつか?』

『申し訳ないんですけど30個お願ひしてもいいですか?』

『OK。ちょっと待つてね。』

秤を用意する。

ここで商談の成功は決まった。

今回もまとめて買ってってくれる。やっぱこいつは太客だ。  
尊敬します。

『27・28・29・・・30!ちよづじね。』

目の前で数を確認する。

中には疑り深いヤツもいるんでね。まあこいつはそういうヤツじやないけど。

「ありがとう!ゼコますーなんかこれからやれそうな気がしてきた  
つすね!」

『やつ思えたならお前はやれるよ。頑張ってくれ。またなんかあつたら連絡してきなよ。』

金を受け取りヤツが出て行ったのを見届ける。

午後3時ちょい過ぎ。

一服つけた後俺も帰宅するとしよう。

昼は暖かかったのにさすがに冬のこの時間は冷えてくる。  
冴えてるのかボケてるのかわからない頭で今夜の晩飯はなににしようか考える。

昨日はなに食べたっけ？

昨日は・・・ダメだ。思い出せない。

ただ、今の俺はもうれつにラーメンが食べたい衝動に駆られている。

うどんでもそばでもなくラーメンが食べたい。

ラーメンが食べたい。ラーメンが食べたい。ラーメンが食べたい。

ラーメンが食べたい。ラーメンが食べたい。

人生は今の繰り返しである。なんてことを思いながら足早にラーメン屋へ行くことにした。

(後書き)

初めての作品で作品と呼べないレベルのものですが読んで頂いた方へ最大級の感謝。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0829r/>

---

クズの素敵な一日

2011年10月8日19時13分発行